

音楽理論学習指導案

日時 平成22年11月17日
場所 芸術棟2階音楽室2
鹿児島県立松陽高等学校
音楽科 1年7組
(男子7名・女子33名 計40名)
指導者 濱田 淳一

1 題材 「音階・調について知ろう」

2 指導目標

- (1) 音楽を構成する要素である音階・調について正しく理解させる。
- (2) 既習曲等を用いて音階・調に関する楽曲分析をさせる。
- (3) 演習を通して音階・調の知識を定着させる。

3 評価の基準

- (1) 音階・調の仕組みについて理解しているか。
- (2) 音階・調の知識を正しく理解し、楽曲分析やソルフェージュに活かすことが出来ているか。
- (3) 主体的に演習に取り組んでいるか。

4 研究テーマとの関連

音階・調について学習することで、音楽理論の理解に必要な基礎知識を身につけるとともに、各自が専門で学習している楽曲を音階・調という視点から分析することで、知識技能と表現活動を結び付けて音楽を捉える契機とする。

5 題材について

(1) 題材設定の理由

西洋音楽理論の主要をなす音階・調の理論を学習することで、楽典の基礎を身につけさせるとともに、演奏の際に不可欠な楽曲分析を行う上で必要な知識であることを理解させ、表現と鑑賞に活用する能力を養うことを目的として、本題材を設定した。

(2) 教材について

ア 教材名

「明解 新楽典 ～音楽を志す人々のために」(音楽の友社)より
第4章 音階と調

イ 指導観

音階・調の学習は楽典の基本を成すものである。現在、我々が日常的に触れる楽曲や、生徒たちが学習している楽曲の大部分が、音階・調の理論をもとに作曲されているものである。また、大学入試において配点・難易度ともに高い調判定の設問も、この音階・調の理論を十分に理解していなければ解答することができない。本題材の学習を通して音階・調の理論が演奏に不可欠な楽曲分析の基礎になるということを理解できるよう指導する。

6 生徒の実態

明るく活発な生徒が多いが、授業中は比較的小となしいクラスである。専攻の内訳はピアノ 10 人、管打楽器 24 人、声楽 6 人である。入学以前の音楽の基礎・基本の定着状況については、音楽科の生徒ということも考慮すると必ずしも十分とは言えず、ソルフェージュの基本的な記譜等についても身につけていない生徒が多くみられる。ただし、入学後は授業でしっかりと学ぼうとする姿勢が強く、集中して取り組んでいる。

7 指導に当たって

小学校・中学校時における学習内容を含め、音楽の知識が音楽科生としては十分に身に付いているとは言えないため、個の理解度に配慮した丁寧な指導を行いたい。

8 指導計画（6時間扱い）

第1次 学習目標を確認し、音階と調の理論を身につける。

第2次 近親調と移調について学習し、既習曲等を用いて音階・調に関する楽曲分析をさせる。

第3次 演習問題を通じて音階と調の理論の定着を図る。

次	時	目 標	題材の評価規準との関連	指導上の留意点
1次	1	○ 音楽を構成する要素である音階・調について正しく理解させる。 ・ 調名と音階名(dur)について理解する。 ・ 練習問題を実践する。	観点1-①・③	五線譜や視聴覚機器・教材を活用する。
	2	○ 音楽を構成する要素である音階・調について正しく理解させる。 ・ 調名と音階名(moll)について理解する。 ・ 音階構成音について理解する。 ・ 調号の仕組みを理解する。 ・ 五度圏について理解する。 ・ 練習問題を実践する。	観点1-①・③ 観点2-①	五線譜や視聴覚機器・教材を活用する。
2次	3	○ 近親調について学習する。 ・ 属調について理解する。 ・ 下屬調について理解する。 ・ 平行調について理解する。 ・ 同主調について理解する。 ・ 練習問題を実践する。	観点1-②・③ 観点2-②	五線譜や視聴覚機器・教材を活用する。
	4	○ 移調について学習する。 ・ 移調の実践例を学ぶ。 ・ 練習問題を実践する。	観点1-②・③ 観点2-②	五線譜や視聴覚機器・教材を活用する。
3次	5	○ 教科書の演習問題を実践する。 ○ 主科の練習曲や既知の曲を用いて、音階や調号を理解しているか復習する。	観点1-③ 観点2-①・②	過去の入試問題等の準備。
	6	○ 教科書の総合問題や過去の入試問題等で演習を実践する。	観点3-①	

9 評価計画

学習活動における具体的評価規準		想定される学習状況と手だて
		A 「十分満足できる」と想定した生徒の状況 C 「努力を要する」状況と判断した生徒への手だて
観 点 1 関 心 ・ 意 欲 ・ 態 度	① 音階と調の理論に興味・関心を持っている。	A 教科書の練習問題に積極的に取り組んでいる。 C 親しみやすい楽曲を用いた演習の取り組みをさせる。
	② 近親調と移調に興味・関心を持っている。	A 教科書の練習問題に積極的に取り組んでいる。 C 親しみやすい楽曲を用いた演習の取り組みをさせる。
	③ 主体的に演習問題に取り組んでいるか。	A 教科書の総合問題等に積極的に取り組んでいる。 C 親しみやすい楽曲を用いた演習の取り組みをさせる。
観 点 2 基 礎 的 な 理 論 の 理 解	① 音楽を構成する要素である音階・調について正しく理解しているか。	A 教科書の練習問題を概ね正しく解答できる。 C 調号の少ない調を設定して演習課題を与える。
	② 近親調と移調について正しく理解しているか。	A 教科書の練習問題を概ね正しく解答できる。 C 調号の少ない調を設定して演習課題を与える。
観 点 3 表 現 と 鑑 賞 に 活 用 す る 能 力	① 教科書の総合問題や過去の入試問題等、主科の練習曲や既知の曲を用いて、演習に積極的に取り組んでいるか。	A 教科書の総合習問や主科の練習曲の分析に積極的に取り組んでいる。 C 親しみやすい楽曲を用いた演習の取り組みをさせる。

10 本時

(1) 目標 (1/6)

- ア 調名と音階について理解する。
- イ 音階構成音について理解する。
- ウ 既知の曲の音階分析を行う。

(2) 展開

過程	学習内容	時間	指導上の留意点 (・は評価の観点)	備考
導入	1 本時の学習の目的を知る。	2	楽典における音階・調の理解の重要性を伝える。	
展開	2 音階について知る。 3 問題演習を解答する。	40	C dur の音階に全音と半音の記号を記入させる。 G 音を与え、長音階を完成させる。(調号を用いずに) ・音階の仕組みに興味を持つ。 ・音階仕組みを理解する。 教科書の問題を指示する。 ・正しく解答出来ているか	ホワイトボード
閉	4 楽曲のメロディーにおける音階の分析をする。		5 曲の曲名を例示し、共通点を考えさせる。 様々な名曲も、音程及び音階の組み合わせでメロディーが構成されていることを認識させる ・学習内容と楽曲との関連に興味をもって課題に取り組んでいるか。	楽譜の準備
終末	5 本時のまとめを行い、次時の予告を聞く。	3	本時の学習内容のまとめと、次時に向けての課題を確認させる。	

(3) 本時の評価規準

- ア 調号 (嬰種・変種) について理解できたか。
- イ 音階構成音について理解できたか。
- ウ 既知の曲の音階分析ができたか。

11 単元の評価規準

- (1) 音楽を構成する要素である音階・調について正しく理解できたか。
- (2) 既習曲等を用いて音階・調に関する楽曲分析をすることができたか。
- (3) 演習を通して音階・調の知識を定着することができたか。

参考資料：

1 メヌエットBWV Anh114 (G dur)

ソ～ドレミファソ～ドド



今日では、J.S. バッハよりも7歳年上の作曲家クリスティアン・ペツォールト (1677-1733) の作品であるとの学説が一般的。

2 赤とんぼ (F dur)

ゆうや～け こやけ～の

ソドド～レ ミソドラソ



3 銀河鉄道 999 (E dur)

さあ ゆく～んだ～

ソドレミ～ファソ～



4 アルメニアンダンス パート I より「アラギヤズ山」 (B dur)

ソド～ソドレミ～



5 TSUNAMI (D dur)

かぜにとまどう よわきなぼ～く

ソドレミファソ～ミファミレファ～ミ



その他の曲

浦島太郎

サザエさん

ラジオ体操の歌

茶摘み

千の風になって